

# かみす

Pick up

- ▶ 神栖市長選挙 開票結果
- ▶ 新型コロナワクチン 3回目接種



まちの魅力再発見

# 渡船物語

みんなが愛した渡し船のストーリー

*The story of the TOSEN that everyone loved.*

かつて、多くの人々が利用した水上交通。通勤・通学や買い物など市民の足として活躍しました。一時は自動車専用の渡船も登場。銚子大橋や息栖大橋の開通により利用者が減少し、平成8年1月、長い歴史に幕を下ろしました。市民に愛された渡船の軌跡をたどります。

AR 広報かみすが  
動き出す



[COCOAR]



アプリをダウンロードし  
表紙にスマートフォンを  
かざしてください。  
詳細は12ページ



# 渡船物語

## みんなが愛した渡し船のストーリー

まだ利根川に橋が架かっていなかった頃、渡船とせんはなくてはならない交通手段であり、人々の生活を支えるものでもありました。懐かしい渡船を通して、水とともにあった暮らしやまちの移り変わりを振り返ります。



### 十数力所もあった渡船場

水に囲まれた神栖市では、貨物船やタンカー、漁船、釣り船、遊覧船など、日常的にさまざまな船を見るのができます。船のある風景というと、海をイメージする人が多いのでは？ でも少し時代を遡さかのぼると、利根川にはたくさん船が行き交っていました。その一つが、通勤、通学、買い物など、住民の足として活躍していた渡船です。

歴史を振り返ると神栖市は、江戸時代から高瀬舟による物資の輸送や東国三社詣などで、利根川水運で栄えた地域。明治時代には、異国情緒漂う外輪付きの蒸気船「通運丸」が加わります。東京や霞ヶ浦へ向かう蒸気船や高瀬舟が利根川を航行し、その合間を縫うように渡船が行き交っていました。

当時、利根川の上流・中流・支流を含め渡船場の数は数百にも上り、現在の神栖市域だけでも十数力所ありました。北から順に、息栖、高浜、萩原、日川、宝山、太田、川尻、矢田部、仲新田、別所、高野、本郷、明神前、仲島、波崎、洲ノ鼻です。渡船場というのは現在のターミナル

駅のようなもので、村の玄関口として賑わいました。鉄道や道路網が発達する前は水運が主役だったことから、神栖市はとても便利な地域だったといえます。

### 人も車も渡船で川を渡る

やがて大正時代後半に手漕ぎの渡船は動力船となり、昭和14年に波崎町営、昭和28年には小見川町営など、渡船事業は町営へと変わっていきました。利根川対岸との結びつきが強い神栖市にとって、この頃の渡船は単に川を渡るだけではなく、千葉県との鉄道に連絡し、行動範囲を広げるための重要な交通手段でした。

この時期の大きな話題は、昭和27年に波崎町営渡船に登場した自動車渡船です。水産物、サツマイモ・でんぷん、農作物、砂鉄原料などを満載したトラク

クやオート三輪、客を乗せたハイヤーなどが渡船で対岸へ渡れるようになりました。当時は水郷大橋から下



自動車渡船場

市内には十数カ所の  
渡船場があった  
※歴史民俗資料館内  
ジオラマより



昭和初期の水郷息栖小見川渡船



三角屋根の待合所がある波崎渡船場



波崎と銚子を結ぶ第八波崎丸。開通した銚子大橋が見える

流に橋がなく不便だったため、自動車渡船の利用は日を追うごとに増えたといえます。

昭和30年代初頭、波崎町営渡船の利用者は年間約300万人(一日平均8000人)、自動車渡船の利用台数は6万台に達したそうです。この数字を見ても、渡船が暮らしや産業に欠かせないものだったことが分かります。

証言1

波崎―銚子間(昭和36、39年)

◆朝は通学、通園、通勤客で満員に  
高校の3年間、渡船で通学した鈴木正彦さんに思い出話を聞きました。当時地元には県立高校がなく、対岸の銚子には4つの高校があったことから、ほとんどの人が渡船で通学していたそうです。



鈴木さん

「波崎(仲島)の渡船場には立派な建屋があり、待合室を通り抜けた先が棧橋でした。いつも朝夕は学生でいっぱいでしたね。波崎だけでなく、奥野谷や日川からバスで渡船場まで来る学生もいましたから。当時は渡船の時刻表がなく、ほどほどに客が乗ったら出航するんですよ。必ず波崎と銚子の両側から船が出て、川の上ですれ違います。

船の後部が荷台になっていて、売の荷物や通勤用の自転車がたくさん積まれていました。それから幼稚園に通う子どもたちも送ってきて、親が棧橋まで子どもを送ってきて、銚子の幼稚園から迎えに来た先生に預けていたような覚えがあります」  
鈴木さんは神栖市文化財保護審議会長を務めており、渡船に関する貴重な資料を整理したばかり。駅舎や船の図面、当時の回数券や定期券(学生用・自転車通勤用・幼児用)などを見ることができました。

◆銚子大橋開通後も渡船を利用

鈴木さんが渡船で通学していた時期は、ちょうど銚子大橋の工事が進んでいる頃だったといえます。



乗船券



①昭和30年代の息栖渡船場。息栖神社一の鳥居の先は常陸利根川 ②現在は一の鳥居のもとに船だまりがある ③水郷のポプラの風景



「昭和37年12月、私が高校2年の時に銚子大橋が開通しました。当初は有料で、自動車120円、自転車10円、徒歩5円。バス通学もできるようなったけれど、運賃が高かったのでみんな卒業まで渡船で通いました。その後だんだん銚子大橋を使う人が増えるとともに渡船の乗客が減り、船は小型になり、便数も減っていったけれど、運航は息長く続けられました」

証言2

息栖―小見川間(昭和42〜45年)

◆一の鳥居周辺の懐かしい風景

阿部文雄さんは、未舗装の道を自転車で息栖渡船場まで行き、そこから渡船、



阿部さん

バス、列車を乗り継いで佐原高校まで通学していました。渡船場周辺の様子は、今とはまるで違っていいいます。現在「息栖の津・渡船場跡」と一の鳥居のもとには船だまりがあり、その先の水門を出ると常陸利根川につながります。しかし阿部さんが高校生の頃は、一の鳥居の先

はすぐ川だったそうです。

「当時、鳥居の右側にはマコモが生い茂り、左側にはポプラの大木が数本並び、正面には川面が開けていました。振り向けば息栖神社の参道、その奥に拝殿も見える。渡船場といえば、そういう風景が印象に残っています」

◆男子生徒は雨も寒さも我慢して

阿部さんは毎朝、7時発の便に乗船。4つの高校の生徒が乗り合わせ、うち2つが女子校だったため、圧倒的に女子生徒の数が多かったそうです。

「渡船の船室は女子生徒に譲り、男子生徒は外の船尾部に乗ることになっていました。雨の日は傘を差し、冬は寒さを我慢して、また帰りは日が暮れて真っ暗な中、船外にいなければなりません。当時はつらいと

撮影：篠塚栄三



通学時の第八おみがわ丸  
この日は女子生徒も船外に出るほど混み合っていた



中洲の小見川閘門



息栖大橋開通式典



水上交通が盛んだったころの小見川渡船場



中洲の水門を通過して常陸利根川と利根川を往来した



平成8年に波崎渡船場で行なわれたお別れセレモニー。市民に愛され、市民の足として活躍した渡船の歴史が幕を下ろした

思ったこともありませんが、今となっては忘れられない思い出です」  
 渡船がなければ通学できないため、寛大な措置もあったようです。  
 「よほどの悪天候でない限り欠航にはなりません、例えば台風で午後の便が欠航になるときは学校に連絡が来て、早退することになります。また、朝の通学時に一度だけ工

ンジンが止まって船が流されてしまい、別の船に曳航してもらったことがあります。そういう時は欠席・早退・遅刻などの扱いにならず、公欠」となります」  
**◆息栖・小見川大橋ができて人の流れが逆転**  
 阿部さんが高校生の頃は、鹿島開

発でまちが一気に変化している時期でした。高校3年生だった昭和44年に鹿島港が開港し、翌年には国鉄鹿島線が営業を開始。卒業から3年後の昭和48年には息栖・小見川大橋が開通し、それとともに息栖と小見川を結ぶ渡船は廃止されました。

「渡船が廃止されるのは寂しい気がしましたが、橋が開通することの方が、自分にとっても地域にとっても重要だと思っていました。昔は松林と砂丘しかなくて、陸の孤島」とも呼ばれたところに、鹿島開発で道路、商店街、企業がみるみる増え、人の流れも逆転。多くの人が橋を渡って小見川から神栖へ働きに來たり、買い物に來たりするようになりました」

渡船の思い出から始まった阿部さんの話は、まちの姿や人の暮らしが劇的に変わっていった背景をひもといてくれるようでした。

### 明治から平成まで親しまれた渡船

波崎の渡船は、銚子大橋開通後もほぼ年中無休で運航されてきましたが、平成8年1月末に終了。明治から平成にわたる88年間の歴史に幕を

下ろし、神栖市にあった渡船はすべて姿を消しました。旧波崎町営渡船場跡には現在、河畔プロムナードが整備され簡易展望台が設置されています。

今では市内で渡船場の名残を見つけることは難しくなっていますが、歴史民俗資料館では1月30日(日)まで収蔵品展「むかしのくらし展くらしの今昔」を開催し、その中で渡船に関するパネルを展示しています。時代とともに水上交通から陸上交通へと主役は移り、便利さに慣れるにつれて渡船



河畔プロムナードの簡易展望台。どこか三角屋根の待合所に似ている